

豊明希望チャペル礼拝

2026/4/26

「心を新たにせよ」

ローマ人への手紙 12:2

あらためて、今日の箇所を読みます。

「12:2 この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。」

この世とは、今、私たちが生きている、この世界のことです。この世界、この世には、たくさんの楽しみや、喜びがあります。人間本来に備わっている、神が人を創ったときから備えられた、人間関係の喜び、家族で、友人同士で、総じて、愛し合うことの喜び、また、労働することの喜び、充実も神さまが人に与えられた喜びの一つです。しかし、「この世」は、そうした、聖書的なというか、健全な喜びばかりではなくて、仕事や学校の場では、人間関係そのものが掛け値なく喜びかという、会社で人と競争して、あいつを追い落としてやったとか、学校で、弱い者をいじめて、困らせて、気持ちよかったというような喜びなども、喜びの一つの形になります。

ここでいう、「この世」とは、どちらかという、そうした、人間関係を破壊していくような喜びをおもに指しています。また、それ自体は罪ではありませんが、生活が豊かになるという、お金が、家が、車がというような、物質的な喜び、特にその喜びが中心で、神さまとの関係が希薄になって、被造物や目に見えるものとの関係を楽しむことの方が優先されるような、そんな価値観を帯びた「この世」のことを指しています。

クリスチャンは、こうした「みんなやっていることだから」という基準ではなく、神様に喜ばれることかどうかを考えるようにしたいものとパウロは言うのです。この聖句の後半「**心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるように**」と言うことで、物や人との関係にとらわれすぎないで、縦の関係、神と私の関係を大切にすることをパウロは、クリスチャンの生き方として強調するのです。それは、神様のみこころを尋ね求め、どうすることが正しいのか、何が良いことなのかを考えて行動できますようにということでもあります。そうすれば、その基準で確信が持てたなら、私たちは迷うことなく、自信を持って、かえって人の目や、この世の損失なども恐れることなく、大胆に生きる事が出来るようになる、この場合、信仰の大胆さということではありますが、そう「**なります**」と言うのです。

教会で証集が出せたことを嬉しく思っています。特に、それぞ



れが、クリスチャンでなかったときから、クリスチャンになって変わったこと、良かったことが、見られるのは、興味深いことでした。ある方は、それを「**今までの人生で感じたことのない幸せと感謝**」と表現され、ある方は、もっと具体的に、身の回りに起きていることで、「**神さまからのたくさんの助けが与えられている**」と語られます。そして、それらは、神さまを信じて信仰生活を歩むこと、聖書を読むことはもとより、教会の兄弟姉妹の交わりを通して与えられたあたたかい経験、また、さらには、教会の仕事、奉仕などは、本来は、たとえば、PTAの役員を押しつけられた父母達のつらさとなるのだろうと思うけれど、教会の奉仕に熱心になって、あまり根をつめると疲れるよと心配すると、彼は、「**今の僕には礼拝に出ることが生きがいなんだ。僕から生きがいを奪うのか・・・**」と、思えるほどの充実感と喜びと、そのように表現される方もおられました。

さて、この聖句で、特に重要なポイントがあります。それは、この部分です。

「心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。」です。

実は、私たちは、それはクリスチャンとなっても、心の葛藤があるのです。それは、よりストレートに言うと、この世と調子を合わせた方が、楽だ、この世と調子を合わせた方がうまくいく、この世と調子を合わせた方が、より幸せな何だという葛藤です。心の戦いです。

私もそう思います。それはそうでしょうと。この体に慣れてるんですね。慣れている方が楽です。いきなり、この世と調子を合われるなどと言われても、時間をかけて慣れれば、すこしは、それでいいという事になるかも知れないけれど、とりあえず、今までのやり方を変えるのは、しんどいということは、当然であります。

そんな私たちに、パウロは、自分で自分を変えると言うより、心を新たにする、あるいは、もっと正確に言えばと彼は、言い換えて、自分を変えていただきなさいと言います。誰に、もちろん、神さまにであります。神さまは、聖霊によって、その価値観や、気持ちを変えることがお出来になるからです。

そのことが書いてあるのは、長い箇所ですので、一部だけ引用しますが、ガラテヤ人への手紙 5:16~26 と、II コリント人への手紙 3:18 に書いてあります。

ガラテヤ人への手紙「5:16 **私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません。・・・**」

II コリント人への手紙「3:18 **私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。**」

時間はかかるかも知れませんが、徐々にではあっても、形が変えられていくのです。

自分では、なかなか出来ませんが、それは、聖霊なる主の働きによって出来るとあるのです。

少し原理について。変な例を。特に、ここまで強調してきた「**自分を変えていただきなさい。**」ということです。

これ、トランスフォーマーっていう、フィギュア、オモチャです。なかなかの優れもので、左のロボットが、カチ



ヤカチャと一瞬のうちに、右のトラック、コンテナトラックに、トランスフォーム、変身するのです。形が変わることで、役割がまるでかわります。一方は戦うための形、一方は、たくさんの荷物を積んだコンテナを遠くに運ぶための役割になる。形が変わることによって、自分自身の形が変えられることによって、役割が変わると言うことです。一方は、殺りくのため、一方は、重い物を運ぶ、きわめて平和的な役割にです。

トラックのままでは戦えません。しかし、戦うロボットのままでは、運べません。運べるかな？いや、片方の手が、ライフルか、ランチャーロケットですから、破壊は出来ても、基本的に大きいものは、運べませんね。

かえって、分かりにくくなったかも知れませんが、私自身が変わる、あるいは、変えられることによって、神さまのために生きて、神に喜ばれ、本来の人間が神に作られたときの、人を愛する力、ゆるがない平安の心、自信ある人生のほうが、もっと何倍も素晴らしいと思える歩みになると言うことです。

私が、あえて、このような例をあげましたのは、英語の聖書には、コンフォームではなくて、トランスフォームなのだと書いてあるからです。

「Rom 12:2 And be not **conformed** to this world: but be you **transformed** by the renewing of your mind, that you may prove what is that good, and acceptable, and perfect, will of God.」

コンフォームとは、順応するという意味で、トランスフォームとは、変形する、変換する、さらには一変させるという意味です。



この世に、コンフォームされるのではなく、神によって、造りかえられなさいというのです。

もうひとつ、ここの言葉で強調したいのは、「**この世と調子を合わせてはいけません。**」です。

もう少し、イメージしましょう。この聖句のこの世に調子を合わせてはなりませんというギリシャ語の意味が、音楽やダンスで言う、テンポを相手に合わせるという意味があると言いました。あなたは、悪魔とダンスをしているのか。それとも、イエス様とダンスをしているのか、相手を間違えてはいけないと言っているのだと言うことです。



こんな人形がアメリカで、おそらくクリスチャンの間で流行っていると聞きました。『ダンシング・ウィズ・ジーザス(イエス様)』試しに買ってみました。アメリカから送られてきますので、来たら、お見せします。(→)こんな感じで飾ると、楽しくなるそうです。

悪魔とダンスするのではなく、イエス様とダンスしようということです。

最初は、誰とダンスするにしても、テンポを合わせ、歩調を合わせるのに、足を踏んでしまったり、かえって、体の節々がいたくなるような事かも知れません。いや、だからこそ、悪魔とのダンスに慣れてしまうのではなく、イエス様とのダンスに、イエス様と歩む歩調になれましょうということです。そのほうがもっと、幸せなダンスとなると。

少し極端な例ですが、本当に、社会全体が、聖書に歩調を合わせ、まさに、私も、社会もつくりかえてしまっているコミュニティーに触れたことがあります。

アメリカに行ったときです。宣教師の故郷、ニューヨークの隣にある、ペンシルベニアには、アーミッシュというコミュニティーがあります。そこに行きました。

おもにドイツのクリスチャンたちが、迫害を逃れてアメリカに渡ってきた人達です。色々な流れがありますが、メノナイト系のクリスチャンが有名です。先生のお友達の家を訪ねました。村に入ると、目を引くのは、ロープの物干しに吊された、鯉のぼりのようにたなびく、洗濯物の光景です。聖書の時代に電気はないので、聖書に許可されていない以上、電気は使うことは出来ません

で、乾燥機は使えませんから、ひたすら干す。電話も文明の利器ですから、家の中に





はない。でも、さすがに困りますから、敷地の外の、道のそこここに、木で作った電話ボックスがあって、そこで電話をする。女性は、聖書にあるようにかぶり物をする。質素を心がけ、白いワン

ピースに、黒い前掛け。車はダメですから、交通手段は馬車です。その地域に入ると、馬車だらけです。町中に馬のひずめの音が、カチャカチャと、鳴り響いています。

最初、私は、宣教師のM師に、これは、観光ですか？と聞きましたが、いいえ、彼らは、まじめに聖書に従っているのだと言われます。「この世と調子を合わせてはなりません。」それは、こういう事なのか？私は、違うと思った・・・しかし、自分の中にわき上がってくる不思議な思いに気づきました。それは、トウモロコシの収穫風景に出会ったときでした。耕作機が使えませんから、馬車で耕作します。みなさん、四頭立てです。女性が四本の手綱を引いて、四頭の馬を、馬車の上から操（あやつ）っているのです。女性として、また、人間としてカッコいい・・・そう思えたのです。それは、見た目と言うより、力強く、信念を持って生きている、私は聖書に従っているという誇りと、自信のようなものを格好いいと感じたのです。アーミッシュの人達は、学校を卒業すると、一旦、アーミッシュの部落を離れるそうです。というより、アーミッシュの生活から、追い出すそうです。町へ行かせ、文明的な生活をさせるのです。そして、再び自分の意思で決断してアーミッシュの生活に帰って来る若者だけを受け入れるというのです。それで・・・まえにテレビで見たことがありますが、なんと、多くの若者は再び帰って来るというのです。どんなに不便であっても、人間にとって何が幸せで、何が本当に必要であるか、何をこそ優先しなければならないかと、身をもって体験し、身をもって体験するとき、結論がそういうことになる、すなわち、その不便な生活に戻るといふ決断をこそする。考えさせられたのです。

宗教改革者カルヴァンは、人は、アダム以来の原罪を後生大事に抱え込んでいると言いました。これが一番の幸せだと信じ込んで、この世に、むしろ固執していると。

神に作られた最初のアダムの状態の喜びを知らないからです。天国では、この地上より、もっと何倍も、何百倍も幸せである事が、未経験だからです。

だから、いまさらと、神を信じません。キリストとダンスを踊れとパウロは言いません。聖書は、また、聖霊は、神は、私を一新させるものです。実は、私が変わる可能性は、たくさんあります。

この週。私たちが、この世に埋没しないで、むしろ、この世の灯りとなり（「世の光」）、味付け（「塩」）となって、この世を美味しくし、むしろ変えていくために、神の御心は何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるかの知恵をいた

だきながら、歩む、この週でありたいと心から願うのです。